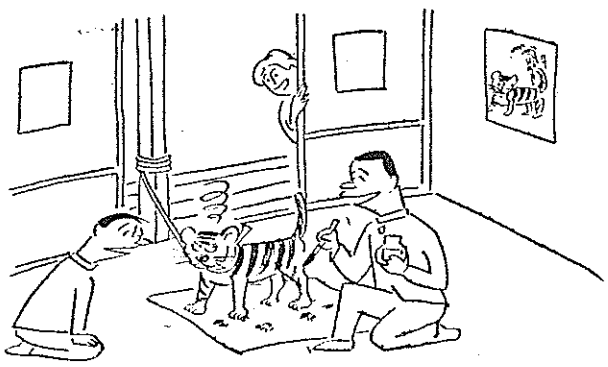
新年応募文芸

新年文芸に応募した数は割合にすくなかった。数がすくないから作品が悪るかろうではない。良い作品のあるのも確かだ。

紙面の都合で本号に掲載できない作品もある。次号に掲載することにしたい。しかし、応募作品全部を採用しないことを附言しておく。

書初め

「下手な絵よりこの方がいいな」　百田利明



編作 短創

元日

十市梨夫

眼をあけると純白のカーテンの隙間から白んだ空が見えた。信吉はいつものように黒いきり大きく伸びをして起きあがろうとした。そうすることによって、廿五才の健康な肉体は、忽ち新鮮な血を呼びもどすのである。かれは元気よく起きあがる。かれを待っているものは毎日決ってタネの尽きない野良仕事だけである。

新妻の道子の匂いがかれの眠覚をくすぐったからである。かれは道子がいつ起きだして行ったか知らない。だがこれは女の部屋なのである。年が明けたら信吉の年剣りが悪くなるというので、かれらは大晦日の夜に仮祝言をすませたばかりである。

野田家の長男である信吉がこの家へ縁づくようになったのは、全く思いがけない事態からであった。N市が国の企図する里山開発の指定地として撰ばれたのは最近のことである。土地区でも果樹研究グループによって、共同経営による三カン新植の計画は進められたが、その開発予定地として指定されたのは、森田家所有の十町歩余の雑木林であった。譲渡の交渉委員の中に信吉もいたが、森田家には信吉と同年配の長女の道子が婚家から帰っていた。昨年の春夫が交通事故で死んだからである。道子が帰ってくると待っていたかのように妹の治子は恋愛結婚へとびだしていったので、自然に道子が養子娘として残ることになった。当主の浩造は譲渡の話には容易に耳を傾けなかったが、その家の女達は割合に好意的であった。信吉は時々道子の黒い大きな瞳に迎えられた。その眼はしかしもはや不幸を経験した女の眼をしていなかった。

明日の午後あの山の入口まできて下さい。是非共お話したいことがあります。

信吉が道子からそんな紙片を受取ったのは最後的な交渉の夜だった。翌日信吉が谷間の道を登って行った時道子はもうそこな陽溜りにいたが、対い合って立っといきなり道子が言った。

「あなたは私を好き、きらい、それを先きに云って。それからお話をするきに」

「好きだよ、ずっと前から……」黒いひた向きな眼に押されてどもりながら信吉が云った。どちらの顔もはぜの落葉のように赤くなっていた。

「あなたが森田家の人になってくれるならあの山を譲らうと父が云うのよ。そんな無理な交換条件を夕べ持ちだすと云うものだから、やっと母と二人で止めたのよ。あなたは野田家の長男だし、それは私は出戻りだもの、いきなり変な話を持ちだしてあなたに断られたら私の立場はどうなるの、それであなたの気持を聞かせて欲しいのよ。先方が跡取り息子なら土地は森田家の跡取りだって父は大変な権幕よ。それに父はあなたをとても好きじゃないかしら。父と何か話をしたことがあるの？」

「あるよ。時々」信吉が剪定をしている時、頑固屋で通っている浩造は、猟銃を肩にしてひょっこり野田家の梨園へ現われて、陽溜りで暫く話しこんで行ったりしたことがある。一見怖いようなひげ男に、信吉はなぜか親近感をもっていた。

「おれは養子に行かうなんて一度も考えたことがない。しかしおれにはそろばんをはじくよりも、トラクターを動かすことの得意な弟が一人いることはいる。三日考えさせてくれないか改めて返事をする。」

すこしこの沈黙の後で信吉が云った。しかし道子は男が無理な自分の申し入れを受諾してくれるであらうことを、もうその時知っていた。

カーテンを引くとすぐ若者の眼に開墾予定地の高森山と空との輪郭が明方の光で鮮かな線を描いているが、谷間はまだしっかりと闇を抱いていた。これからは自分はいつも眼があいたらあの山を見るだらうと信吉は思った。ふと背後に道子の匂いがした。

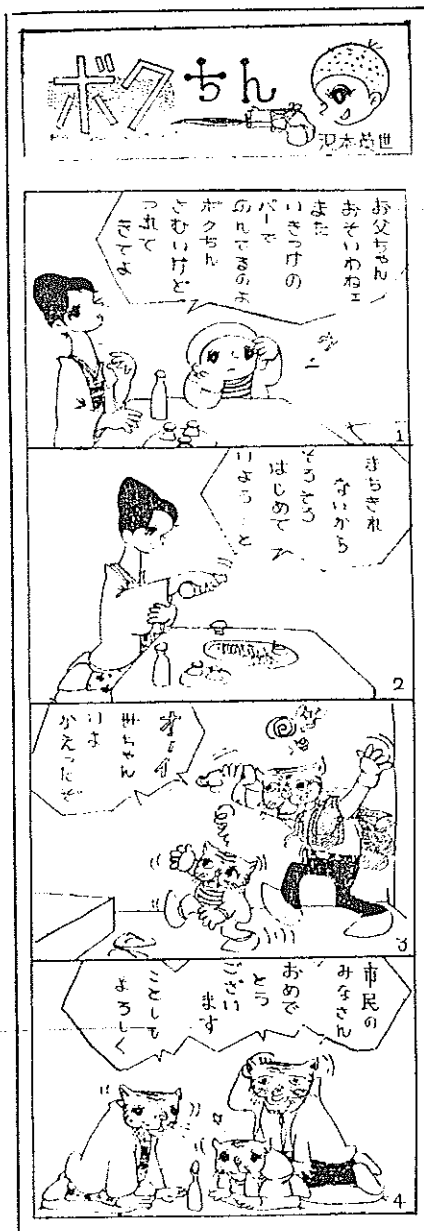
「何を見ているの？」やさしい声であった。「考えているんだよ」男は静かに答えた。「何を考えているの？三日も考えてやっとこの家へきてくれたのに、まだ何か考えることがあるの？」道子は不安な瞬きをして、柔らかな手を夫の肩に置いた。

「将来のことならいくらでも考えることがある」

「開墾地のことね」それで道子の声が明るくなった。だが道子にはこんな朝、夫が山のことばかり考えているのが、すこし気に入らないのである。

「男はいゝわれ、立派な仕事があって生きがいがあるもの……」道子は夫の眼を覗きながら云った。夫は返事の代りにだまって道子の眼を見返した。どちらも笑わなかったが、道子の眼の奥には昨夜の情熱の名残りがまだ漂っていた。

「女だって大変な仕事があるぢゃないか。子供を生んで立派に育てるということは大変な仕事だよ」今度は夫が笑いながら云ったが、一瞬道子は虚を突かれたおもいですこしたじろいだ。そして改めて夫の眼を見た。昨日までの信吉は確かに道子ほど大人になっていなかった。この一週間ばかりの交際の間にも自分の考えが透かに姉さんであったと思う。この人の考えはたった一夜の間にこんなにも成長しただろうか。他家へ嫁ぐことが人間の脱皮をはやめるぐらい道子も経験で知っているが、しかし道子は明日の午後あの山の入口まできて下さい。是非共お話したいことがあります。



お誂紳士服は
西田洋服店へ　南国　電話 443

統合堰と茂久川（3）

南海虚子

◆野田・城陸・西の窪方面は新川に手を触れるのが不安かも知れないが、現在西向きに新川え流しこむ大小数流の排水は、肝腎な場合に新川の猛水勢に押えつけられている。以下、これらの排水機能の円滑化を考えてみると共に、平野水利の大勢を好転せしめ、かつ平野悪化の将来に備えるための茂久川関係に移りたい。

新川のまだ開通されなかった昔は、前述の水路はそのまま西方え流下し、後面南方の平野に灌水しながら落ち去っていた。これが新川の出現で両断されているのが現状である。では新川は何の目的で掘られたであろうか。当時西野々、住吉野、伊達野、介良野の未墾地帯を水田化するために、特に舟人から新川を敢って送水を図ったものである。

このため前記の西流諸水路は開中で隔絶され、大雨時には新川の水勢に阻まれて野田以南の東翼平野は湛水を現象するようになった。同時にこれを全部引受けた新川の増水は沿線えの溢水となり、近年は併走する県道と高さを競うように水は益々膨れ上るわけ。いはば他の文化系の展開する施設だといって、新川の必要さからみるなら、後免町内のカーブ移動その他若干の修正の手を加えると共に（別述）、前記した西流の通水を立体交叉とし、昔の西流し去る自然の姿に復元することによって、野田以南の氾濫禍は避けられよう。本来野田や後免以南の用水は竹黒川の機能下におかれているが、追ってその項に譲りたい。

◆ここで余談の一息をいれよう。舟人や山田堰のまだ出来なかった以前では、下野田や城陸、西の窪から後免以南の灌漑用水は、標高三十余米の談議所から自然に西南平野部へ駆けおりてくる一派の物部河水（ナカソ川筋）を受け入れ、下野田の石堰でその分派の西南流するのを適当に操作しながら、これ等の田面に導いて灌漑していた。この当時の自然流路が今に頗廃転落の姿で利用もされているしその昔の河跡も平野に刻まれている。また現在東西の方向に野面に横たわる多くの溝渠も、早くから祖先の手で開かれていたものであるが、新開拓地のため新川の中断に委かすの外はなかった。この一座頭の中座敷的な構造の新川が、そのままの姿で昨今堅固に美装されているのは甚だ心許ない。これでは後免周辺も悪態の現状に固定され、沿線の水禍離脱や水利向上も改善の途を塞ぐであろう。農勢といい町勢といい、前向の姿勢に建て直すことを考えるなら、新川に温い手を差伸べると共にその基調をなす茂久川え最高の敬意を表したい。これに関連して胸に灼熱を感ずる切実さがある。それは他に非ず舟人問題だ。従来舟人は世間で過剰評価され、盲目的信頼がかけられていたではあるまいか。今次統合堰に係る幹線用水路の構成原案をみるに、一面では開発的新規事業もあるが、その大半は旧来の悪態踏襲のままに固定づけられ、前進的開発の新生命が宿されてない憾みなきや否や。今日平野全面に亘っての改装整備を敢行するは困難な事情もあろうが、せめては他日の施工に備えての基本構造は完遂しておきたい。この意味において当局の舟入中心設計原案には筆者は賛意を表しがたい。それは茂久川も新川も竹黒川も、この舟入を散慕していないからだ。そこで舟入は改装して平野東半の総管として充分に機能を発揮せしめ、平野西半は茂久川の新威力に統監させたいのである。これは香長平野が扇状地の特色をもっているからだ。

◆茂久川の新水系構造に移ってゆこう。舟入とは未練なく縁を絶つのであるが、舟入は明治や岩村の徳松井筋以東を灌漑領域に限定することにより、それ以西松本部落東頭までは廃用となる。同時に舟入下流部が改めて新鋭水路に転装されて茂久川系に入るのであるがまず茂久川の素性について捜っておきたい。兼山事業として中井開通は二十五才の一六三九年、山田堰構築が三十才の一六四四年、上井開通がその翌年、舟入開通はそれから十四年後で兼山四十九才の一六五八年、このように中井による西野地の開拓は早かったが、西南方の茂久川筋は中井の水が懸からないので見送られていた。それから二十年も経過した後に、兼山は長浜運河にヒントを得て物部河畔に引返しこの舟入を開いたのであるが、未墾地に舟入利用を思付いたのが新川とこの茂久川とであった。だから西野地残墾地帯へは中井の水は無能力だと見限っていたので、南側の舟入に心を引かれたのは是非もなかった。中野で導入した茂久川の水は、なずみがちに西え運られているが、松本部落の北東頭で、北隣寸前に迫ってくる中井に何で頭を向け直さなかったのか。

（以下次号）

初春

岡崎富子

初春よ
お前は又おとづれて来た
きゝとれぬ程かぼそい
花かげのさゝやきわ
春をよぶ息吹だ
やがて大きく輪をえがきつゝ
冷めたい空の彼方にとけて行った

初春よ
私はもう五十路が近い
山すそにひとすじ
入日が光をなげる頃
赤い雲の果てに消え去ったはずの
思出だけが
刺すようによみがえる
突風のはげしさで
旅役者の太鼓のような悲哀をこめて

初春よ
私の肥満したこの胸に
うすみどりの若さはもうかへらない
しらじらとした老えの
ひとすぢ道が
じっと動かないで
私を待っているのだ

女子従業員募集

輸出用の敷物刺繍工などを土佐山田町の第一敷物ＫＫ高知工場が募集している。

△面接　1月23日午前10時
土佐山田町公民館

△女子刺繍工　16才～30才　120名
女子一般従業員　30才～40才　50名

△労働条件　1日8時間　週休

△賃金　見習2ケ月日給で月6600円（交通費を含む）
6ケ月（平均 8,550円）
1カ年（平均 9,750円）

△その他　社会保険、有給休暇、退職金制度あり